

# 渡米する金魚

— 昭和初期の金魚輸出 —

一九三一（昭和六）年一〇月八・九日、伊勢佐木町の野澤屋五階ホールにおいて、神奈川県水産会・横浜市水産会・神奈川県輸出金魚組合・横浜観魚会の主催により「神奈川県金魚品評会」が開催された。これは、消費費地に近い神奈川県において、養殖事業の中でコイやウナギは他県に圧せられているが、金魚は国内だけでは無く海外にも市場があり、発展の余地があるとして計画されたものであった（『神奈川県水産会報』二二、一九三二年）。

こののち、品評会は、何年か続けて行われた。横浜では、一八七七（明治一〇）年に金魚養殖が始まり、輸出は一八九〇（明治二三）年に始まったと言われている。昭和初期には、横浜市勸業課が『横浜に於ける金魚の養殖及輸出状況』（一九三四年三月）を発行しており、これらの歴史を記録している（以下、『養殖及輸出状況』と略す）。

また、大正・昭和初期には外務省によるアメリカ市場調査等もあり、関係する「外務省記録」はアジア歴史資料センター（Web）で閲覧することができる。以前は、歴史公文書等所在情報ネットワーク検討連絡会議）においても紹介されていた。

これらの資料から、昭和初期の金魚養殖と輸出について紹介していこう。

## 横浜における養殖と輸出の始まり

先に見たように、一八七七年に横浜市の金魚養殖は始まったと言われている。『養殖及輸出状況』（以下同書）によると、細田清重という人物が中区末吉町に金魚商を開業し、現在の若葉町三丁目付近に約五〇〇坪の養殖池を設けたことが始まりだという。次いで、一八九五（明治二八）年、安藤勇五郎が戸部町に五〇〇坪の養殖場を設けている。その後、一九〇一（明治三四）年頃には平沼町に脇和吉、〇八（明治四一）年には北方町に加藤金蔵が養殖場を設けるなど、明治後期に増加している。より趣味性の強い蘭鑄は、一八八五（明治一八）年、弁天通の八木屋が東京から持ち込んで飼育したのが始まりだという。次第に同好者が増加し、一九九年横浜観魚会が組織された。その後、一九二三（大正一二）年の関東大震災で打撃を受けたが復興し、三三年頃には観魚会員約三〇人、一般にも相当飼育者があるとしている。

輸出の始まりは、他説もあるが、一八九〇（明治二三）年、カナリヤなどの輸出商であった前出の加藤金蔵が、エンプレスオブジャパン号の乗組員の依頼により、一〇〇尾の和金を木製手桶に入れて販売し、バンクーバーに届けられたことであったという。その後、同船等が出帆するたびに二〇〇尾か

ら次第に増加させていったという。一九〇七（明治四〇）年には、シアトルにも輸出するようになり、この頃には一回に二万尾、年間一〇万尾を輸出するようになり、輸送容器が、手桶から「改造四斗樽」に替わったのもこの頃からという。輸出尾数が増加したために、先述のように加藤は養殖場を作り金魚養殖にも進出している。また、他の輸出商も出てきたようである。

一九二〇（大正九）年には、父親が金魚や小鳥の輸出商である水野熊吉が、輸出用金魚の養殖を行うための養殖場を岡村町に設置している。二二年には三三万尾を生産し一万二〇〇〇円の売上げがあったという。しかし、二三年の関東大震災では養殖場や店舗が全滅している（以上、「岡村の金魚王」、『浜・海・道Ⅱ』磯子区役所、一九九三年）。水野は直ぐに養殖を再開しているが、この大震災は、横浜の金魚養殖業にとっては大きな打撃であったものと思われる。その後、水野は、昭和初期には「加州ヘエイワードに支店を営み、〔略〕全米に販路をひろめ、現在にては、全国、殆んど氏に比ぶものなき状態に当り、年々百万を輸出し、〔略〕用地は、現に四千六百坪を擁し、全国生産の八割を氏の手によりて海外に輸出せられつゝある」（『横浜市誌』一九二九年）と言われている。

まず、昭和初期の全国の金魚産地と

神奈川県的位置を確認しておこう。一九三三（昭和八）年の生産を見ると（表1）、三大産地（奈良県郡山・愛知県弥富・東京市江戸川・城東区等）を擁する奈良県・愛知県・東京府の合計が八割を超え、特に一位の奈良県の割合が非常に高い。次いで静岡県・神奈川県が続いている。神奈川県は三大産地とは差があるが、主要な産地のひとつであった。

次に、神奈川県と横浜市の金魚養殖場についてみると（図1）、養殖場数では、県は一九二六年に二箇所であったが、翌年は一箇所増加し、二八・二九年は減少したが、その後、三六六年までほぼ増加傾向にあり、三六年五八箇所・三七年五四箇所がピークとなった。面積では、三三・三四年の約四万六〇〇〇坪がピークで、以後、一場あたりの面積は急激に減少する。これは高座郡・中郡に、規模の小さな養

表1 1933年府県別、主な金魚産地

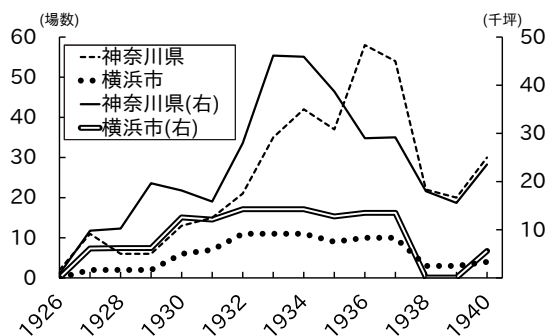
府県名	数量 (百尾)	割合 (%)	金額 (円)	割合 (%)
奈良	228,394	44.4	375,330	57.9
愛知	109,319	21.3	84,065	13.0
東京	86,275	16.8	81,241	12.5
静岡	14,108	2.7	13,951	2.2
神奈川	11,355	2.2	13,896	2.1
その他	64,507	12.6	79,618	12.3
合計	513,958	100.0	648,101	100.0

出典：出典：『第十次農林省統計表』1934年。

殖場が多数造られたためであった。三年には、神奈川県が奨励する副業のひとつとして「金魚養魚池の新設」が挙げられており（『中外商業新報』三月一日）、増加の要因のひとつと思われる。

横浜市では、養殖場数では二七年に二箇所となり、三一年に六箇所、三二年に七箇所、三三年には一箇所増加し、以後、三七年まで九〜一箇所まで推移し、三八年には三箇所となった。面積では、三〇〜三七年は一万二五五二〜一万四二六〇坪と県合計と比べる変化が少ない。県が伸びる三二年以前では、二九年を除き六割から七割以上を占めていた。その後、鎌倉郡に広い養殖場が出現し、川崎市でも増加したために割合を低下させるが、それら四七パーセントとなっている。三八年

図1 神奈川県・横浜市金魚養殖場数（左）・面積（右）



出典：『神奈川県統計書』各年。

表2 1926～31年 金魚輸出高

年	数量(尾)	金額(円)
1926	1,700,000	138,000
1927	1,600,000	220,800
1928	2,000,000	276,000
1929	2,800,000	345,000
1930	4,000,000	520,000
1931	2,700,000	450,000

出典：『横浜に於ける金魚の養殖及輸出状況』（横浜市勤業課）

表3 1931年度 輸出港別

港名	数量(尾)	金額(円)
横浜港	1,350,000	202,500
神戸港	600,000	90,000
四日市港	750,000	112,500
計	2,700,000	405,000

出典：表2と同じ。

表4 1931年度 仕向先別

仕向先	数量(尾)	価格(円)
シアトル	1,188,000	178,200
ニューヨーク	621,000	93,150
サンフランシスコ	486,000	72,900
ロサンゼルス	405,000	60,750
計	2,700,000	405,000

出典：表2と同じ。  
注：ロサンゼルスの数値は訂正した。

次に、三一（昭和六）年について詳しく見ていこう。表3は、輸出港別にみたものであるが、横浜港から五割、四日市港から二割八分、神戸港から二割二分であった。表出していないが府県別では、愛知県が七五万尾（四日市港）、奈良県が六〇万尾（神戸港）、静岡県が三〇万尾に対し、神奈川県は一〇五万尾と全体の四割弱を占めていた。しかし、先の記述にあるように東京産なども輸出されており、「正確な統計資料が無い為」、取扱者の説を総合した横浜港輸出の供給地別では、東京六割・神奈川二割・静岡他二割とある。これら県内や東京から入ってくる金魚は、金魚輸送用の木製丸桶（直径約五五センチ、深さ約二四センチ、入蓋）に入れ貨物自動車で輸送し、浜松・弥富からは鉄道便であった。到着後はコンクリート池に入れて輸出に備えた。この後、先述のように四斗樽に入れて輸出された。また、サンフランシスコ（桑港）航路の日本郵船さいべりや丸・これや丸には、「噴水装置様設備」の専用タンクがあり、従来、輸送中に五割以上になることもあった死亡率が大きく改善されたという（『中外商業新報』三〇年一月一四日）。三年頃では「近來輸送技術が進歩した為」に歩留まりが良くなり、シアトル九割、桑港八割、ロサンゼルス（ロス）六割となった。

次に仕向先を表4から見ると、シアトルが四四パーセントを占め一位、次いで紐育が二三パーセント、桑港が

の落ち込みは、六月末の水害によるものであろう。生産金額では、横浜市は二七・二八・三〇年では、一五、六〇〇円・一四、六〇〇円・二二、五八四円と県全体の八〜九割を占め、その後、三七年までは約五五〜六五パーセント（三四年は例外）であり、三八年の激減前は県内一の産地であった。これらの統計では、先の水野熊吉の例から見ると補足されていないものもあり、統計の数字以上の生産があったものと思われる。

**昭和初期の輸出の様子**

『養殖及輸出状況』は、金魚輸出についても詳細に記載している。これによって輸出の様子を見ていこう。

表2は一九二六（昭和元）〜三二（昭和六）年の貿易高を示したものである。このうち二六年の数量は、『中外商業新報』三一年九月八日の記事では、一〇〇万尾となっており疑問が残るが、該期には輸出高を増加させていることが分かる。三〇（昭和五）年には四〇

〇万尾、五二万円とピークとなり、翌年には一〇〇万尾以上の減少となった。この頃の横浜の主な輸出商は「前記加藤氏（震災後本牧に移る）、岡村の水野氏、杉田の石橋氏等」であった。また、従来は船員に任せていた輸送から、輸出商の店員が乗船し荷に付き添っていくようになった。二九（昭和四）年までは、これらの横浜の金魚輸出商によって輸出されていた。

ところが一九三〇年になると、産地が直接輸出をはじめ、愛知県弥富は四日市港から、奈良県郡山は神戸港から積み出すようになった。翌三一年には、ニューヨーク（紐育）の奈良貿易商會が郡山・弥富・浜松産金魚を直に取り扱うようになり、奈良貿易商會と産地を仲介していた横浜の輸出商は、東京・神奈川の金魚を斡旋するだけとなった。この奈良貿易商會は、三三（昭和八）年秋になって輸出金魚の取り扱いを休止したために紐育向けは激減したという。

次に、三一（昭和六）年について詳しく見ていこう。表3は、輸出港別にみたものであるが、横浜港から五割、四日市港から二割八分、神戸港から二割二分であった。表出していないが府県別では、愛知県が七五万尾（四日市港）、奈良県が六〇万尾（神戸港）、静岡県が三〇万尾に対し、神奈川県は一〇五万尾と全体の四割弱を占めていた。しかし、先の記述にあるように東京産なども輸出されており、「正確な統計資料が無い為」、取扱者の説を総合した横浜港輸出の供給地別では、東京六割・神奈川二割・静岡他二割とある。これら県内や東京から入ってくる金魚は、金魚輸送用の木製丸桶（直径約五五センチ、深さ約二四センチ、入蓋）に入れ貨物自動車で輸送し、浜松・弥富からは鉄道便であった。到着後はコンクリート池に入れて輸出に備えた。この後、先述のように四斗樽に入れて輸出された。また、サンフランシスコ（桑港）航路の日本郵船さいべりや丸・これや丸には、「噴水装置様設備」の専用タンクがあり、従来、輸送中に五割以上になることもあった死亡率が大きく改善されたという（『中外商業新報』三〇年一月一四日）。三年頃では「近來輸送技術が進歩した為」に歩留まりが良くなり、シアトル九割、桑港八割、ロサンゼルス（ロス）六割となった。

次に仕向先を表4から見ると、シアトルが四四パーセントを占め一位、次いで紐育が二三パーセント、桑港が

一八パーセント、ロスが一五パーセントと続いている。資料によると、従来はロスが約六割を占めていたが、同地の取引問屋が中国人であったために、三一年は日中間の悪化により減少したとする。このような事はシアトルでも起こっている。また、先の専用タンクを報じた記事では、桑港が過半と報じている。後述のように、多くは西海岸で陸揚げし、消費地へ鉄道等で運ばれていった。

以上、見たように、金魚の輸出先はアメリカが殆どであったが、他の地域への輸出も試みられている。『神戸又新日報』二八年四月二〇日の記事では、オーストラリアやフランスへの輸出を報じている。また、『横浜貿易新報』二九年一〇月二五日の記事では、静岡蜜柑六〇噸を冷蔵庫積にして翌月にアルゼンチンに向け横浜港を出港する大阪商船「ブエースアイレス」号に、金魚を見本として乗せ、成績が良ければどしどし送るそうであると報じている。『養殖及輸出状況』では、最近の輸出先として、アメリカが約九割五分、オーストラリアが四分、フランスが一分ぐらいとしている。

**同業組合の結成**

このように昭和初期には金魚輸出が盛んになってきたが、一方で粗悪品を輸出するものや、「売崩」などの問題も起き、農林省や帝国水産会では、これらを防止するために重要物産同業組

表5 横浜の金魚業者

名前	所在地	31年 会員	養殖及輸出状況		
			組合	飼育(坪)	輸出
水野熊吉	磯子区岡村町	○	○	3,000	○
加藤金蔵	中区本牧町	○	○	800	○
石橋三郎	磯子区杉田町	○	○	1,200	○
赤萩光吉	磯子区岡村町	○	○	1,500	○
細田宗治	磯子区丸山町	○	○	1,500	○
野本辰五郎	中区花之木町	○	○	-	○
島田健三郎	中区花之木町	○	○	-	○
長谷川太郎	中区真金町	○	○	-	○
加藤金太郎	中区浦舟町	○	○	-	○
二橋太郎作	中区南太田町	○	○	1,500	○
渡辺正夫	磯子区杉田町	○	○	300	○
寺本関太	神奈川区篠原町	○	○	150	○
安藤桂一	中区戸部町	○	○		

出典：31年は「昭和六年三月 組合員名簿」（日本輸出金魚同業組合）、他は表2と同じ。

合法による組合結成を慫慂した。

八日、帝国水産会主催により金魚輸出促進協議会が開催された（『帝国水産会沿革誌』一九四三年）。東京・神奈川・千葉・奈良・愛知・静岡・山形 of 業者や関係者等が出席し、日本輸出金魚同業組合の設立を決議している。組合は、農林省への申請が同年十一月一〇日付、同月二五日には認可となった。定款によると、組合の地区は日本全国とし、組合事務所を東京の帝国水産会内に置き、「金魚、緋鮎、変り鯉及緋目高」を養殖し海外輸出者に販売する者・海外輸出を業とする者の組織であり、輸出の際には、産地証明書を一樽ごとに必ず貼付する等の規則を決めた。役員は、三一年三月では、組長は帝国

水産会長村上隆吉、副組長は東京の秋山吉五郎・愛知の内藤守正・奈良の岩井市松の三大産地が就任し、評議員（一名）に加藤金蔵が就任している。七月現在の組合員数は八三名、府県別では奈良県二〇、愛知県一八、東京府一五、神奈川県一〇、千葉県九、静岡県三、埼玉県二、京都府・兵庫県・山形県・秋田県・富山県・福岡県が各一であった。

表5は、横浜の組合員を示したものであるが、三一年では神奈川県の一〇名のうち九名が横浜であり、多くが現在の磯子区や南区に所在していた。『養殖及輸出状況』では、二名減少四名増加で一一名と若干増えている。なお、所在地から渡辺正夫は石橋三郎の後継と思われる、また、野本の所在地が上大岡町となっている。この組合員のうち、八名が飼育池を持ち養殖も行っていたと思われる、先述の水野熊吉が三〇〇〇坪と最大で、次いで野本・島田・渡辺が一五〇〇坪であった。また、輸出を取り扱っていたものは八名であった。

以上のように県内業者は全国的組織に加盟したが、一方、他産地は競争相手でもあった。三〇年後半には、県内でも組合の結成が進められていた。同年一〇月二一日には、県内業者等二〇名が出席し金魚懇談会が開かれ「金魚の輸出が奈良県、愛知県に押され気味であるから此の際当業者が奮起して県下の増殖を計り従来業者の間に連絡統一がなかったから新に金魚輸出組合を組織」することを決めている（『横

貿』一〇月二二日）。組合の組織・形態は不明だが、神奈川県輸出金魚組合が組織された。

(一)の項は、JACAR: RefB090421482  
 (二) 外務省記録E4903\_001「日本輸出金魚同業組合定款送付ノ件」等、『水産物関係雑件 第一巻』

**昭和初期のアメリカ市場**

以上、輸出元の横浜の様子を見てきたが、次に輸出先のアメリカの金魚事情を見ていこう。大正初期の外務省の調査もあるが、ここでは、三二（昭和七）年、外務省が農林省から「合衆国ニ於ケル金魚ノ需要及飼育状況」などの調査依頼を受けて調査した、シアトルなどからの報告をみていこう。

先ず前年の仕向先一位であるシアトルを見ていこう。領事の報告では、アメリカ国内における生産地や需要地が主に中西部・東部諸州であることなどから情報が少ないと述べ、その中でシアトルについては、先ず日本産金魚の輸入業者が四店（米国人・中国人・日本人児玉直市・斎藤捨次郎）あるとしている。このうち、児玉は「金魚池ヲ有シ一時盛ニ東部地方ニ輸出シタルコトアリ」、また斎藤は「金魚ヲ飼育シ磅ニ卸売小売ヲ為スモ規模大ナラズ」と記されている。輸入商の最低販売価格は、琉金四セント、出目金八セント、キャリコ八セントなどで、蘭鑄は二〇セント以上であった。また、輸入商・日本の輸出商間にお



ける売崩事情も報告されている。これによると、シアトル港に輸入される金魚の大部分は、横浜の石橋・水野・加藤等の輸出商の取扱であるが、輸送中に衰弱死亡するものが多いために、積出港渡し価格を決めることや積出地で商談を決めることは困難であり、輸入港付近に「保魚施設」が無ければ、手持ちを迅速に売り捌く必要が出てくる。そのために売崩があるのは止むを得ざるところとしている。こういった事情からか、水野熊吉は二八年に桑港に近いパロ・アルトに養魚池を設置している（「岡村の金魚王」）。また、中国人商の Gon Wing & Company が、石橋商店の輸出金魚に対し「日支事件二因ル対日『ポイコット』ヲ盾トシテ取引ヲ拒絶」したために、米商に「破格ノ安値」で引き取らせた事例も報告している。この前年には、金魚付添人が航海中に不慮の死を遂げたために「捨値同様ニテ処分」した事例も挙げている。最後の事例は、一月に横浜を出航したプレジデント・クリーブランド号に乗船した茂木正男が、一五日に北太平洋上で暴風による高波に金魚樽と共にさらわれて行方不明となったと報じられている（『横濱』一二月二二日）。

も、現在には輸入量の数十倍もの生産が米国内で行われているので、どの程度まで実効性はあるかは分からないとする。また、二八年の米商務省水産局統計を挙げているが、輸入量は三万八千尾、卸価格は三万九千〇〇ドルであった。この種類は、琉金 (Fantail) 五五パーセント、出目金 (Telescope) 二一〇、キャリコ (Calico) 一〇、コメット (Comet) 一〇などであった。一方、米国産は、「コムモン」・「カメット」・「ニンフ」・「ファンテイル」・「朱文金」が主で、二八年では「コムモン」一七〇〇万尾、その他四五〇万尾、計二一五〇万尾であった。この数字が、どこまで信憑性があるか疑問とするが、輸入量と比較して「生産量ノ大ナルハ注目ニ値ス」としている。これらから、「コムモン」等の一般向けは、値下げや品質の改良がなければ競争は難しく、出目金・蘭鑄等の特種金魚は宣伝等により相当の販路があるとした。



写真1 和蘭獅子頭（『養殖及輸出状況』）

次にロスの報告を見てみよう。同地には、浅利鶴松と秋山清美の二名の輸入商が居り、今のところ売崩は無いとしている。日本産が歓迎されているのは、Fantail, Telescope, Lionhead 等の「上等金魚」にあるとし、シアトルと同様の指摘している。しかし、一方で米国人の金魚趣味は向上しているものの「未ダ甚ダ幼稚ニシテ色赤ク勢良ク値段安ケレバ購求スル」とし、日本産需要の九割が琉金・出目金なので、今後、これらとキャリコ・朱文金が必要の多くなる種類としている。最後に紐育の商務書記官からの報告を見てみよう。紐育には日本産金魚の輸入業者は無く、主な取扱業者でも扱っていないとする。先に見た「奈良貿易商会」の記載は無く、詳細は不明である。需要は、四〜五年前は金魚の生産量が少なく日本産は「珍重」されていたが、現在は「一般ノ愛玩用トシテハ稍飽カレ気味」としている。また、米国内の養殖増加と不況により価格が下がり、現在では「五仙十仙均一店」でも販売されるようになったと述べている。そのなかで日本産は「玄人筋」に認められているので、小売店では多少は所有しないと「沽券ニ関スルモノ」であるが、多くは「単ニ養殖業者ノ種付用トシテノミ需要アリ、今後モ此ノ状態ハ継続スルモノ」としている。これら日本産の多くは、先に見たように西海岸から汽車で輸送され、シアトル―紐育の輸送では三分の一が死亡するという。このように輸送上の不便がある

ので、日本産が米国産との競争に堪え得るか疑問とする。

以上のように一九三二年頃は、米国内における金魚養殖が進み、和金やコメットのような一般向けは価格面で競争が厳しく、「上等金魚」「特種金魚」のみが販路拡大の余地があるとされた。(一)の項は、前掲JACAR: B09042148 200 外務省記録「北米合衆国ニ於ケル金魚ニ関スル調査方ノ件」等、『水産物関係雑件 第一巻』)

#### 付 イモリ輸出

アメリカには、金魚や小鳥のほかにも愛玩動物としてイモリが輸出されていた。三一年には「最近では金魚と同様クリスマスやキースターの贈物にまで使はれるとか」で、二八年八三〇〇尾、二九年一万四六〇〇尾、三〇年三万二〇〇〇尾が横浜港から輸出されたと報じられている（『東京朝日新聞』六月七日）。また、三二年、外務省通商局の問い合わせに回答した神奈川県金魚輸出組合長加藤金蔵は、輸出高一〇万尾、一尾一銭と回答している。 (JACAR: B09042163300 外務省記録『水産物関係雑件/貝類ノ部』)

#### 【参考文献】

- 『浜・海・道Ⅱ』（磯子区役所）一九九三年、『岡村の今昔』（「岡村の今昔」刊行委員会）二〇〇八年、葛城峻『やぶにらみ磯子郷土誌』（磯子区郷土研究ネットワーク）二〇一五年。 ※『横浜貿易新報』以外の新聞引用は、神戸大学附属図書館デジタル版新聞記事文庫による。